

# 大学生の不登校への理解とその対応 ～T君の相談事例を基に～

切 手 純 孝

第一工業大学 共通教育センター教授 (〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

E-mail s-kitte@daiichi-koudai.ac.jp

## Understanding and correspondence to the school non-attendance of the college student

From the consultation example based on a recollection record of his own

In the college student, it is thought that there is not a little a student refusing to go to school for the following reasons:(1)Even if they try to take a course, they are worried about eyes of another person and cannot enter the classroom. (2)They find out that they have to go to college, but a body causes a refusal reaction, and it cannot move. (3)A future target isn't seen, so they don't know what they should do. Such a consultation is several in our college in a year, and there is the student who experiences school non-attendance in a junior high school and high school days in that.

As the factor, there is much emotional confusion such as the uneasiness, and it becomes over period of time in many cases, and it is said about the correspondence and improvement that it is quite difficult.

Therefore I look back on an example of Mr T who graduated from our college in March, 2016.

He came to refuse to go to college from entrance at first, but Mr.T could conquer the going to the school non-attendance and graduate while getting teacher's support from a department at the same time receiving counselor's counseling at the student consultation room.

Key words : school non-attendance of the college student, emotional confusion such as the uneasiness

### 1 はじめに

現在、日本の大学における不登校については、詳しい状況等は把握されていないのが現状である。しかしながら、どの大学にも不登校の学生が少なからずいることには間違いがないと思われる。本学においても、毎年2～3名程度の相

談がある。その中には、中学校や高校時代にも不登校を経験している学生もいる。その多くは不安など情緒的混乱による不登校が多く、「他人の視線が気になる」とか「理想と現実のギャップに悩み元気を失う」とか「自分の将来に対

する漠然とした不安から何もする気力が起こらない」などといった理由から不安感情が高くなり、過度に周囲を気にするあまり自宅から外に出ることができない状況となり不登校状態におちいる場合が多くみられる。

それ以外では、このような不登校とは異なり「アルバイトが中心の生活になり講義へ出席しない」とか「大学に入るのが目的であったので目的が達成された結果今度は他のものに夢中になり大学に来なくなる」とかいった理由での不登校の学生もいる。一人一人の学生の状態や状況が様々であるため、その対応はなかなか難しいと言わざるを得ない。

一方、対応に当たる大学教職員の不登校に対する考え方も様々である。例えば「大学は学生本人が希望して入学するものであるから、大学に行く気がないのであればしかたがない」とか「学生本人の進路希望や目標が変わった結果、大学に行く気がないのであればしかたがない」とか「高校を卒業して大学生となったのだから本人の考えに任せるべきではないか」などあくまでも学生本人の自主性に任せるべきだという考え方があるように思われる。しかし一方では、せっかく入学してきた学生だからいろいろな指導・援助を行いながら卒業させて社会に送り出すことが大事であるという考え方もあるように思われる。このような中で、大学における不登校を解決するためには、まず不登校学生への理解を深めることとその現状把握が大事であると思われる。そして、どのような指導・援助が必要であるかを大学全体で考えて取組んでいくことが大切ではないかと考える。

そこで今回は、本学を平成 28 年 3 月に卒業した T 君の相談事例を基に話を進める。T 君は入学当初から不登校となったが、学生相談室でカウンセリングを受けながら、また同時に学科等の先生方の指導・援助を受けて不登校を克服し、第一希望の企業に就職した。この T 君の相談事例をもとに大学における不登校の学生への理解

とその対応について述べる。

平成 27 年度の中学生の不登校は 9 万 8408 人で、36 人に 1 人の割合になっている。これは 1 クラスに 1 人以上の不登校生徒がいることになり、その数の多さには驚かされる。ここでいう不登校とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況である（ただし、病気や経済的な理由によるものは除く）」と定義されているものである。

また、高校生の不登校については、4 万 9563 人で、67 人に 1 人の割合になっている。これは約 1.6 クラスに 1 人の不登校生徒がいることになり、中学生と同じくその数の多さには驚かされる。このような不登校生徒の中には、完全に不登校が改善されないまま大学に入学してくるケースも少なくはないと思われる。このような不登校の学生に対しては、入学当初から大学の教職員全体で指導・援助を行っていくことが必要であると考えられる。そこで、今回の T 君の相談事例における指導・援助や助言等が少しでも参考になれば幸いである。なお、以下は T 君の述懐に基づいて記述を進める。

## 2 T 君との相談状況

### (1) 大学に入学してから学生相談室で相談を受ける前まで（4月上旬～7月中旬）

Q. 大学入学前の高校生時代の学校生活について尋ねてみた。

高校 3 年生の頃は、ずっと高校の相談室にいたので、これから大学で本当にやっていけるのか、本当に卒業できるのかすごく気がかりでした。しかし、大学に進学して環境が変われば、気持ちの変化が出てくると思ったりもしました。

また、高校卒業前に通った自動車学校では、薬を飲みながらの登校であったため、なかなか講義に出ることができず、免許を

取るのに他の人の数倍の時間が掛かってしまいました。

T君は高校では毎日相談室に登校して一人で勉強をしていた。ほとんど教室では授業を受けることができない状況にありながらもテストの点数は悪くはなく成績は良い方であった。それは担任の先生をはじめ教科の先生方が時々相談室を訪れて、励ましの言葉をかけてくれたり、教科書・プリントの説明をしてくださったからだ話す。自分の不登校の状態をよく理解し、対応してくれる先生方に感謝しているように感じられた。

Q. 大学入学後の状況について尋ねてみた。

大学に進学して環境が変われば、気持ちの変化が出てくるのではと思っていましたが、入学式にも行けず、入学式の後も大学に通学出来ず、気持ちが逃げていました。オリエンテーションや学科集会に出られなくて情報も全くなかったので、大学のことがとても気になっていました。

T君は大学に進学したら環境が変わるので、今の不登校の状態は改善されると思っていたようである。しかし、いざ大学に行こうとしても体が拒否反応を起こして動けなかった。学校に対する恐怖心は大学に入学しても何も変わらなかった。自分ではどうしようもなかったと話す。

Q. 大学入学後の1週間から2週間まで

最初の習熟度クラス分けのテストが受けられず、同じ学年の人たちと出席のことや勉強のことでも差がついたので、自分自身のことだけでなく、すべてのことがとても不安でした。クラス分けのテストに参加しなかったこともあり、なかなか通学できずにいました。

T君はクラス分けのテストを受けなかったことで、自分がどのクラスになったのかが分からないことでの不安で、大学に行きたくても行けない状況にあったようである。また、学科の学生たちや大学の様子が全く分からない状況に大きな不安を感じていたようである。

Q. 1年生の4月中旬から5月の連休明けまで

授業を相当休んでしまっていたので、この年は諦めて来年から大学に行こうと考えていました。さらには、大学を諦めて就職しようかとも考えていました。大学に行つて勉強したいと思っけていても、緊張して教室に入れず、自分の意思で教室に入るのが難しかったです。

この頃のT君は、頭で考えていることと行動とが一致しないもどかしさがあり、自分自身ではどうしようもない状態が続き、諦めの心境になっていたようである。不登校の解決を自分のなかに求めないで外（環境）に求めていたようである。

Q. 1年生の5月中旬から6月末まで

大学に行きたいという気持ちはありましたが、いざ大学に行くと教室に入ることが出来ませんでした。高校の時のように先生に相談しようと思いましたが、大学は義務教育ではないし自分の意思で行くところなので、もし相談しても「対応できない、大学に来られないのなら辞めるしかない」などと言われると思っていたので、なかなか誰にも相談できなかったです。

大学のホームページや学生便覧のもっと分かり易いところに、学生相談室があるなどの紹介があるのもっと良かったと思います。

T君は約1か月が過ぎ、落ち着きを取り戻し

自分が置かれている状況を冷静に見つめられるようになってきている。このような状態になった時に、誰かに相談が出来ていたらもっと早く不登校を改善できていたかもしれない。というのは不登校で外出がほとんどできない状況下であっても、自宅でゆっくりと休んで自分を冷静に見つめられる状態になったら、一般的にはその時が登校刺激を与えて登校を促すチャンスであると言われる。ではどのような登校刺激を与えたらよいか。例えば、まず大学側から「講義への欠席が多いけれども、体の具合でも悪いのかな？、何か困っている事でもあるのかな？、もし何かあったらどんな小さなことでもいいですから相談してください」などと1回目は電話による小さな登校刺激を与える。次に家庭訪問を行い直接本人と面談するというように、1～2週間くらいかけてゆっくりと繰り返し繰り返し登校刺激を与えることが大切である。また、保護者とも連携を取り、お互いに協力し合いながら対応していくことも必要である。

Q. 1年生の7月上旬、相談を受ける前まで

前回のようによく考えていた時に先生から電話があり、なんとか大学に行き、教室の後ろに座り講義だけは受けていました。教室の中では周りの学生の目を気にしながら受けていました。しかし、長くは続きませんでした。

クラスアドバイザーの先生から電話があり、このままではいけないと思い、T君は勇気を奮い立たせて大学へ行き教室に入った。しかし、教室では周りの人の目が気になり、手のひらに大量の汗をかき、講義の内容はほとんど頭には入らなかったと話す。そして、また不登校状態になったようである。父親はこれ以上は無理だと判断し、退学願いの手続きに大学を訪れた。そこで、学生相談室のカウンセラーと初めて会い相談を受けることになった。

(2) 最初の相談から1学年の終了まで（7月中旬～3月下旬）

Q. 1年生の7月中旬、1回目の相談

教育相談をしているところが大学にもあると知って、少し安心しました。また、自分の状態を話して、カウンセラーの先生が話を聞いてくれて少し気持ちが楽になりました。その後もなんとか大学には行っていました。大学が近くなると体調が悪くなっていました。周りの人の目が気になって、講義を受けるときはいつも一番後ろの席に座っていました。

T君は無理をして講義に出席していることが分かったので、高校の時と同じように教室ではなく学生相談室に通うことを目標に切り替えたところ毎日登校できるようになった。朝9時に学生相談室に来て、教科書やプリントをもとに自分で勉強し、そして持参した弁当を食べて帰るという日々が続いた。しばらくすると表情も以前に比べると少し明るくなり中学時代の話をよくするようになった。

Q. 1年生の8月から9月まで（夏季休業中）

この頃も何とか大学には行っていました。大学が近くなると体調が悪くなっていました。この頃は夏休みで、大学の雰囲気慣れるために学校に通っているような状況でしたが、人がほとんどいない状態でもやはりつらかったです。

夏季休業に入り大学内に学生が少なくなったので、T君と話し合い教科担当の先生との接触と教室に慣れる練習を始めることにした。

まず、数学入門の先生に教室で1時間程度数学のプリントを指導してもらった。担当の先生にはT君の状況について事前に話を理解を求めた。その他、学科の先生にも時々お願いをして同様に接触を図った。

## Q. 1年生の10月上旬（後期の講義開始）

数学入門の先生の授業は一年間掛けて取る講義で、今までいなかった人間（自分）が教室にいることになるので、周りの反応がとても気になっていました。この頃は皆と同じ教室に入って授業が受けられる科目もありましたが、一緒に受けられない科目もありました。周りの人の目を気にしながら受けていた授業は、一番後ろの入り口に近い席に座っていました。

後期が始まり、T君の顔はこわばり少し青ざめているように見え緊張していることが分かった。そこで、夏休み中にT君がいろいろと練習をしたことや先生方とも話ができていたことを再確認し、T君に自信を持たせた。具体的にはT君のことを周りの先生方にもよく理解してもらっていることなどを話して、無理をしない程度に自分ができる範囲の中でやっていくようにアドバイスをする。

T君は後期の講義はすべて受講するつもりで履修届を出していたが、教科によっては1～2回出席する中で、結局受けられないということと途中で相談室に帰ってくることもあった。そこで、できるだけ無理のないように少しずつゆっくりと単位を取っていき、4年間で卒業するのではなくて5年から6年間で卒業できればいいと考え、余裕をもって臨むようアドバイスした。

## Q. 1年生の11月から3月まで

この頃は5～6年で卒業しようと考えていました。また、2年生から始まる実習のことがとても気になっていました。周りの人の目を気にして、やはり受けていた授業は後ろに座っていました。テストの時は、別室で受けたり後ろの席で受けたりしていました。

T君の中で今受けられない教科は、無理をせず体調が万全になってから受講しようと考えられる余裕が生まれ落ち着きを取り戻してきた。

ある時、受講できないでいた教科の先生に、勇気を振り絞って教室に入り自分の今の状況を話した。そして、中間テストなどの名簿順に座席を指定しての受講はできないので一番後ろの座席に変更してくださいとお願いしたところ、あろうことかその先生は「君だけを特別扱いはできない」と言われた。そのことを泣きながら話した。当然のことながら、その後はその先生の教科はすべて受けられなくなった。

この頃はT君とも信頼関係が深まり、またT君自身も大分落ち着きを取り戻していたので、いろいろなことを話せるようになっていた。そこで、なぜ周りの人の目が気になるかについてT君に尋ねてみた。

「僕は知らない人に話しかけられたり、知らない人が多くいるところでは緊張して汗が噴き出てくるのです。それを周りの人に見られるのが嫌なんです。だから、このことが良くなれば何でもできるのですが、中学生の頃はそんなことがなかったのもので何でもできましたし、こんな苦しみもなかったです」と話した。

また、2年生から始まる実験・実習について、グループで行うことに大変不安を持っていた。そこで、今の状態で受講が難しいのであれば、来年に延ばしても十分間に合うとアドバイスをすると顔がぱっと明るくなった。

## (3) 2学年に進級してから2学年の終了まで

## Q. 2年生の前期（4月～7月）

電験の勉強をやっていた関係もあり実験には興味がありましたが、教室で授業を受けるだけでも精一杯だったので、実験は受けられませんでした。この頃は、物理担当の先生の部屋で物理の単位を取るために個別で授業をして頂いていましたが、申し訳

ない気持ちと自分が我がままだという気持ちがありました。この頃はまだ、周りの人の目を気にして授業は後ろの席に座って受けていました。この頃から、相談室でも電験の勉強を始めました。

2年生になったというか、2年生になれたといことで気持ち的にも楽になったようで、1年生の科目も積極的に受講していた。しかし、まだ周りの人の目が気になり汗が噴き出てくる、これを治す方法を教えてくださいと言う。本人なりにいろいろと考えながら頑張っている様子が伺えた。そこで、汗が噴き出てきたらすぐふけるように少し大きめのハンカチかタオルを準備してはどうだろうかアドバイスをする。

一方、電験の資格試験は大変難しく合格するには最低でも3年ぐらいはかかるということであった。その難関の電験の資格を本学のW先生が持っているということを知り、是非勉強を教えてくださいとお願いしてみても話すと何か考えているようであった。しばらくするとW先生の研究室に一人で行けるようになり、一段と電験の勉強に熱が入るようになった。もともと学力は高く理解力もあり、勉強をすることはそれほど苦にならないようであった。

Q. 2年生の後期 (10月～3月)

電験の勉強を続けていくことで、電気のことが少しずつ分かるようになって、電気科目の授業は少し楽しくなってきました。資格試験を県外に受けに行き、すごく緊張していたが、自分が思っていたほどではなく、意外と普通に試験を受けることができ科目合格もできたので、少し自信がついてきました。また、このことがきっかけで、皆と一緒に授業を受けられるようになり、試験も別室で受けなくてもよくなっ

てきました。(それでも緊張はしていましたが)資格試験では前方の席に座って受験したこともあり、大学の授業でも前の席に座ってみようと思い、たまに前の席に座って講義を受けていました。

父親が付き添って電験の資格試験を県外で受験し、科目合格が出来たことでT君は自分に自信が持てるようになった。このことがきっかけでT君は、いつも言っていた「知らない人と話すことや人の前で話すことなど普通にできていた中学時代の自分」を少し取り戻すことができたようである。その結果、受講した科目はすべて優秀な成績で単位を取得できた。このことも自信につながったようである。しかし、実験・実習が受けられるかどうか不安であると話す。

#### (4) 3学年に進級してから3学年の終了まで

Q. 3年生の前期 (4月～8月)

この頃は、単位のことと留年のことを気にしていました。電験の勉強をやっていたこともあり、実験には興味がありましたが、まだ実験を受ける気になれず、実験Iだけ受けるようにしていました。しかし、クラスアドバイザーの先生から今後の就職活動のことを考えると、4年生は時間の余裕があったほうが良いので、実験I・IIを受けるようにと言われました。しかし、自分としては気持ち的にまだ準備が出来ていなかったため出来ないと伝えたところ、先生から受けられない理由を聞かれました。そこで正直に今までのことを話しました。すると、その先生も自分と同じようなことがあって病院に行った経験があるという話をしてくれました。また、同じような経験をしたからこそ君の気持ちもよく分かるので、何かあったら相談に乗るからこれからは遠慮なく尋ねてくるようにとのお話

を頂き嬉しく思いました。そして、単位が取れなくてもいいから履修するよにとの助言を受けました。その先生が実験Ⅰ・Ⅱともに担当されたので、気持ちが楽になり安心できました。また、実験担当の先生が、周りに分からないように、さりげなく気を使って頂いていたので教室に行きやすかったです。

このようなこともあり、何とか実験に参加していましたが、実験があった日は、帰ったら食事もせず寝てしまうくらいに身体的にも精神的にも負担がありました。しかし、何とか前期を終えることができ、この年の電験でも科目合格が出来たので徐々に自信がついてきました。

3年生に進級したT君には課題であった実験・実習が待ち構えていた。しかし、偶然にもT君と同じような経験を持つ先生が担当になったことで、T君にとっては心強い見方が現れ背中を押してくれる形になった。実験・実習におけるグループの人間関係やその中での役割分担などについてもT君とよく話をするようになった。しかし、緊張することと汗をかくことについてはなかなか解決できないと話す。

Q. 3年生の後期（10月～3月）

電験の試験会場で試験を受けられたこと、電験の科目合格ができたこと、前期の実験が出来たこと（同じ班の人と話をしたり）で自信がつき、この頃から家に帰ってからも夜中まで電験の勉強をする余裕も出てきました。また、目標や就きたい仕事もあり、留年したら就活に不利になるということもあったので、様々なことを前向きに考えて、物事に挑戦しようとするようになりました。この頃から後ろの席に座ることはあまりなくなり、大体どこにでも座れ

るようになっていました。

T君はすっかり本来の自分を取り戻し、自信を持っていろいろなことに前向きに行動ができるようになってきた。そして、3年生の後期で100単位を修得し、4年生に進級して卒研に入り4年間で卒業したいと話をする。

そして、2月下旬には100単位以上を修得する見込みがつき、自分の性格等を考えて3社の会社訪問を考えていると話をする。その様子は自信に満ち溢れ一段とたくましくなった感じがした。

(5) 4学年に進級してから卒業まで

Q. 4年生の前期前半（4月～5月）

この頃は目標も決まり、これから社会人になるので、気持ちを強く持つようになっていました。卒研の人とも話合いなどある程度できるようになり、人と話することに對しても、少し自信がついてきました。また、今までは考えられませんでした。一人で東京まで行くことができ、本社で試験を受けてくることができ、今まで以上に自信が付きました。

2年半ぐらいで、ここまで回復し成長するのは予想だにできなかった。1つのきっかけで大きく変わっていく姿を見ていると不登校で悩んでいたころが嘘のように感じられ、子供の成長のめざましさを再確認させられた。

Q. 4年生の前期後半（6月～8月）

この年も電験の科目合格ができ、内定式の懇親会（立食パーティのような感じ）でも、社員の人や他の同期の人とも普通に会話が出来ました。ここで話が出来たのは、実験の班の人と話をしたり、同じ学科の人と話をしたり、卒研の人と話をしたりして

いたからだと思います。この頃でもまだ緊張はしていましたが、もうすぐ社会人になることもあり、気持ちを切り替えないといけないと思うようになったからだだと思います。卒研の中間発表では、人前での発表が4年ぶりくらいだったので手がすごく震えました。しかし、学科内で行われた内定者発表の時は、気持ちの持って行き方を変えたら中間発表ほど手も震えず緊張も多少抑えることが出来ました。

学科の内定者発表会で3年生を前にT君が発表するとということで様子を見に行った。堂々とした落ち着いた発表で内容もコンパクトにまとめられてあり感動させられた。発表後相談室でT君は「発表原稿を夜遅くまで作成し何回も練習したので上手に出来ました」と話し、その姿は自信に満ち溢れていた。

#### (6) 最後に、これまでを振り返っての感想

高校で様々なことがあり、高校3年生の時と大学の最初の頃は、教室に入れませんでした。就きたい仕事もあり、様々なことを勉強して働きたいと思っており、取りたい資格もありました。しかし、人前に出ることが怖くてなかなか踏み出せないという状況でした。ここまで続けて来られたのは、先生方が大学でサポートしてくれて少しずつ人前に出ること慣れ、資格試験にも挑戦しようと思えたこと、資格試験の時には父親に付き添ってもらって遠い県外の試験会場に行くことができ、何とか科目合格が出来たこと、そしてそのことによって自信がつき授業に出席できるようになったこと、また授業に出席できるようになったことで実際の試験を受けることが出来て単位が取れたこと、実験を上手く乗り越えられたことで就活も何とか乗り越えられたこ

となど、その時々にはすごく緊張したり、きついこともあったりしましたが、少しずつ出来ることを増やして行って、少しずつ自信をつけてこられたからだだと思います。また、目標があったことで何とか大学を続けているうちに自信がつき、気持ちも変わって前向きに考えられるようになったからだだと思います。

### 3 まとめ

大学における不登校の中でも、特に不安など情緒的混乱の不登校傾向の学生について理解を深めるとともに、どのような対応や指導・援助が望ましいかを考えてみた。今回はT君の相談事例を基に、相談場面の中で相談者(T君)が実際に感じたことや考えたことを本人自身に書いてもらったりあるいはカウンセラーに話した内容などを基に、その時々不登校の状態や状況に合ったより望ましいと思われる援助や助言をカウンセラーの立場でまとめた実践事例である。今後の不登校傾向の学生への理解向上とその対応の一助になれば幸いである。

最後に、約3年間におよぶ不登校状態の中で、その時々状態や状況並びに心の葛藤などについて、当時を振り返りながら率直に書いてくれたT君の協力に心から敬意を表し、感謝を申し上げたい。

#### 【参考文献】

- 牧野幸志：大学生の不登校に関する基礎的研究(1)－大学生の不登校と退学希望の理由の探索－ 高松大学紀要 No36 2001年
- 切手純孝：立ちどまってもいいんだよ－自立を促すカウンセリング－高城書房 2003年